美しい景観の足元が花いっぱい

酒井省吾　84歳

朝4時起床、鎌を研ぎ畑へ向かう。6時半に朝食、11時半には昼食&休憩で家まで戻るが、また夕方五時半まで畑で過ごす。風呂に入り晩酌をして夕食。酒井省吾さん84歳の一日だ。そして、その畑で育てられているのは花。面積は4反歩にもなるという。

中越地震の全村避難で注目を浴びた旧山古志村。避難中には全国から多くの支援を受けた。何とかこの支援に応えたいという想いを抱いた。酒井家は震災から2年後、家に戻った。酒井さんの目には「国敗れて山河あり」の光景が広がっていた。先人の汗の染み込んだこの土地を荒らしたままには出来ないという思いと、養鯉場や田に再生することが極めて困難であることも容易に理解でき苦悩した。そして一人立ち上がった。美しい山古志の景観の足元を花で飾ろうと。地を耕し汗をかき、心地よい疲労感は、明日やることのある幸せとともに、健康な睡眠をもたらし、喜びを生み出す原動力となった。

かつて、酒井さんが村長だった頃、同志と3万円の出資をして中山隧道の保存に立ち上がった。やがて、数千万の基金となり県を動かすきっかけとなったという。今同じように、4年目の活動となる花畑作りは、個人のみならず公の協働を生み始めている。

天国を思わせる景観
支援できないほうがおかしい

鈴木重壱　61歳

震災被災現場視察の帰り、何ともすがすがしい青空の中、そこかしこに咲く花畑が目に留まり立ち寄ったことが酒井氏との因縁でした。一角で黙々と汗を流すご老人とご家族。後姿から発する光濠しいほどのオーラは、今も鮮明に残っています。酒井さんは、「ふるさとを守りたい」という事と「震災でお世話になった人への感謝の心」を熱く語られました。こんなすばらしい活動を支援できないほうがおかしい。是非とも支援申し上げたいとの思いから落葉樹チップの支援を行いました。まさに天国を思わせるその景観こそ酒井省吾氏の神の手による傑作です。この活動の輪がさらに広がる事をご祈念申し上げます。

‖ 市民協働 story ‖

酒井さんは旧山古志村の元村長さんです。村長を経験したからこその知見、生き様が見事ではないでしょうか。私人として、ふるさとへの想いがあったからこそ、協力者が現れ、地域の名所となり、公を動かす力にもなり得たことを見せてくれています。